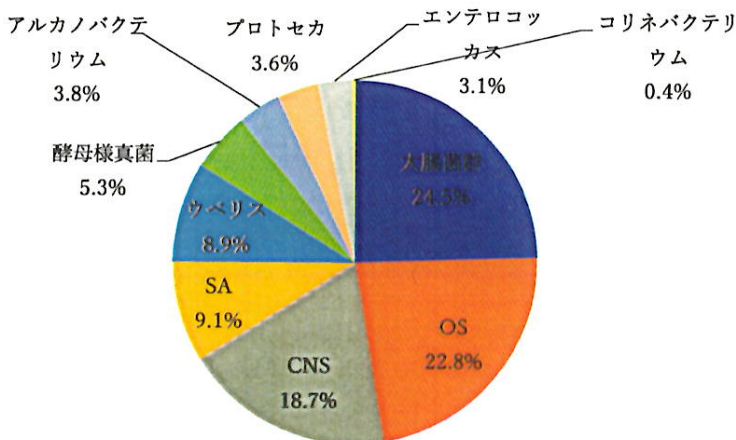


【乳汁検査まとめⅡ】

前回に引き続き、弊社で行っている乳汁検査についてまとめました。今回はOS、CNS、SAの薬剤感受性について報告いたします。

2019年の1年間で実施された乳汁検査では、延べ検査頭数1610頭、延べ検査分房数3266分房(A分房771、B分房850、C分房793、D分房852)でした(重複含む)。この中で菌の生えたものは43.7%、菌の生えなかったものは56.3%でした。スクリーニング検査や乳房炎の治癒判定での検査等含まれるので、菌なしの割合が高いと思われます。

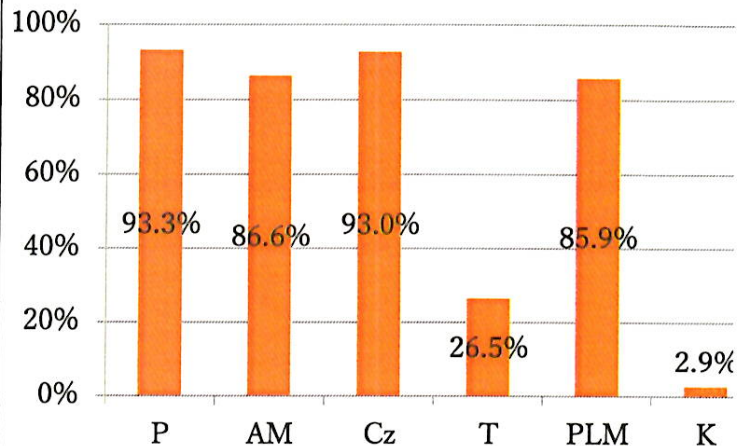
菌の生えたものの内訳は、大腸菌群(大腸菌、クレブシエラ、緑膿菌、その他の大腸菌含む)が最も多く24.5%で、次いでOSが22.8%、CNSが18.7%、SAが9.1%でした。(グラフ1)



グラフ1 乳房炎原因菌割合

OS、CNS、SAによる乳房炎は、前回紹介した大腸菌群による乳房炎と比べると重篤な全身症状が起こる可能性が高くはなく、診療を依頼するよりも軟膏注入や抗生剤、消炎剤の注射等の自家治療を行うことが多いのではないのでしょうか？

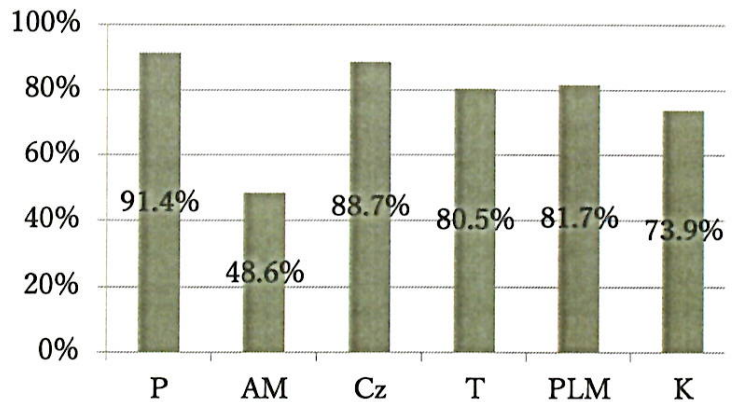
大腸菌群による乳房炎を除くとOSの割合が最も高く22.8%となります(この中にはウベリスは含まれません)。OSによる乳房炎に対する薬剤感受性はグラフ2の通りです。ペニシリン(以下P)、セファゾリン・セファメジン(以下Cz)のOSに対する感受性は高く共に90%を超える結果となりました。アンピシリン(以下AM)、ピリルマイシン(以下PLM)もOSに対しての感受性が85%という結果になりました。一方でオキシテトラサイクリン(以下T)、カナマイシン(以下K)のOSに対する感受性は低い結果となりました。



グラフ2

OS乳房炎に対する感受性薬剤の割合

続いてCNSについてです。CNSによる乳房炎に対する薬剤感受性はグラフ3の通りです。



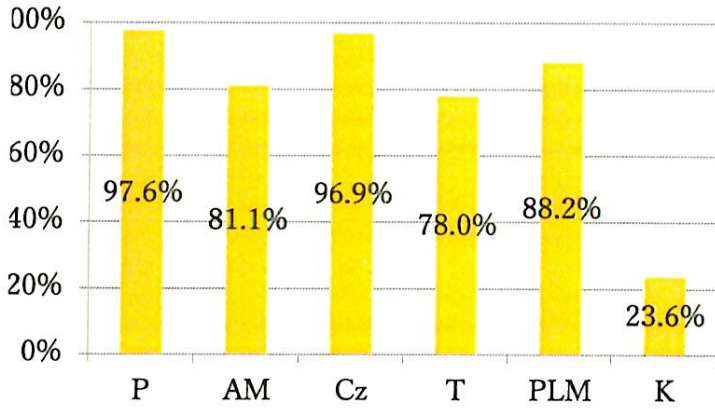
グラフ3

CNS乳房炎に対する感受性薬剤の割合

Pが最も感受性が高く91.4%となり、Cz、PLM、Tの3つは感受性が80%を超える結果となりました。AMのCNSに対する感受性は50パーセントを下回る結果となりました。

最後にSAによる乳房炎に対する薬剤感受性をグラフ4に示します。





グラフ4

SA乳房炎に対する感受性薬剤の割合

SA 乳房炎に対しては P、Cz の感受性が特に高く共に 90% を超えました。PLM、AM の 2 つは感受性が 80% を超える結果となりました。K の SA に対する感受性は 30% を下回る結果となりました。

今回まとめた乳汁検査のデータは牛舎形態、飼養管理、自家治療の有無等様々な農場で発生した乳房炎の乳汁検査の結果です。なので、全ての農場に当てはまるものではありませんので。自家治療する際などは参考程度にお考え下さい。

感受性薬剤略式及び対応薬品

	注射薬	乳房炎軟膏
P	ペニシリン	ニューサルマイ
AM	アンピシリン	—
Cz	セファゾリン	セファメジン・セファゾリン
T	OTC 注	OTC 軟膏
PLM	—	ピルスー
K	カナマイシン	タイニーPK

菌名略称

- OS 環境性レンサ球菌
- CNS 環境性ブドウ球菌
- SA 黄色ブドウ球菌

富田



Total Herd Management Service